

# ASTRO2023(第 65 回北米放射線腫瘍学会)体験記

岐阜大学放射線科 小堀朗和

## I. はじめに

今回、岐阜大学医学部附属病院国際医療センターによる国際学会参加支援事業プログラムからご支援いただき、2023年9月30日から2023年10月4日にかけての5日間、アメリカ合衆国カリフォルニア州、サンディエゴで行われたASTRO (American Society for Radiation Oncology) annual meeting 2023(第65回北米放射線腫瘍学会)に参加してきました。これは放射線腫瘍医にとって最も大きな国際学会のひとつであり、私にとっては初めての海外学会参加でもあったため非常に貴重な経験となりました。体験記としてここにご報告します。(Fig.1)

## II. 学会の会場・雰囲気

アメリカ合衆国のカリフォルニア州、サンディエゴ (San Diego Convention Center) が会場でした。日本からは飛行機でおよそ12時間、時差は日本からマイナス16時間です。気候については、日中で25度前後と比較的過ごしやすく半袖のTシャツで過ごす人が目立ちましたが、夜になると20度を下回り上着が必要でした。

学会会場については、日本と比べて機器展示会場・講演会場をはじめとした全ての規模が一回り以上大きく、会場間も遠くセッションごとの部屋の移動が大変でした。会場の照明は今回のテーマ色の青色のほかにパープルの会場もあり日本の落ち着いた雰囲気と対照的に派手な環境でしたが、セッションではかなり真剣な雰囲気での講演が行われ、質疑応答も活発であり、日本の学会会場の雰囲気との違いに驚きました。

(Fig.2,3)

新型コロナウイルスの影響も少なくなってきたのか、参加者は世界各国から集まっているようでしたが、アジアはやや少ない印象でした。服装はラフなイメージがありましたが、日本と同様スーツやジャケットで比較的硬い印象を受けました。会場の至る所で挨拶が交わされ井戸端会議が開かれており、同行した上司もアメリカ留学時代の同僚に会うなど、コロナ明けの久しぶりの再会を楽しんでいるようで現地参加ならではの光景でした。

オーラルでの発表や、ポスター発表については活発に議論・質問が行われていました。最新の臨床試験の結果も多く報告され、各分野のエキスパートがディスカッション

する様子は興奮しました。臨床現場での問題や疑問点など、今後の発展につながる「生の声」を聴くことができ、学会への現地参加の重要性を改めて感じました。

ところで、サンディエゴはメキシコとの国境が近いのもあり、ダウントウンにはタコスを売りにするレストランが目立ち、街の雰囲気もどこか陽気で、若者が集まっていて活気がありメキシコ文化の片鱗を感じました。また機会があれば、映画トップガンのロケ地巡りやダルビッシュ投手が所属するメジャーリーグのパドレスの試合観戦など観光のため訪れたいと思いました。(Fig.4)

### III. 聴講を通して感じたこと

本大会のテーマは「Pay It Forward: partnering with our patients」でした。「Pay it Forward」とは直訳すると「先に払う」の意味ですが、これは「自分が受けた善意を他の誰かに渡すことで、善意をその先に繋いでいくこと」という意味で、2000年に「Pay it Forward」という映画が公開され注目された言葉だそうです。現代医療は Evidence-Based Medicine: EBM(根拠に基づく医療)が重要とされていますが、そのエビデンス構築のために様々な臨床試験が行われ、今回の学会でも多数の試験結果が発表され注目を集めていました。試験の参加者は数百人から大きなものだと千人を超えるものもありますが、全て実際の患者さんの協力により成り立っています。「より良い医療のため」に過去の患者さんが与えてくれた知見を我々医療従事者は十分に把握して実臨床に活用し、現在の、そして未来の患者さんに還元していく義務が有る。この姿勢は「Pay it Forward」として、大会期間を通して多くの演者によって語られ、日々の診療に対し身が引き締まる思いがしました。

また Plenary session では、頭頸部癌の放射線治療における経済毒性についても語られていました。インドをはじめとした東南アジアやアフリカなど低所得国家では頭頸部癌の発症率・死亡率が高いにもかかわらず、経済的な面から放射線治療の普及が不十分であることが問題視されており、演者は臨床試験の結果から治療期間短縮により低コスト化できる可能性に言及していました。日本の中だけにいると考えることの少ない、国家間を超えて全ての患者さんに質の高い医療を提供するという問題を身近に感じることができたのも国際学会ならではの経験でした。

### IV. ポスター発

現在、私は心臓の不整脈への放射線治療をテーマに大学院で研究を行っており、

「The new quantum image by Dynamic Nuclear Polarized MRI for the assessment of cardiac radioablation to the cavotricuspid isthmus」という演題名で今回ポスター発表を行いました。会場にはデジタルポスターが閲覧できる端末が 30 台弱設置され、セッションの時間になると割り当てられた発表者たちが集まり各々でセッションを進めていくといった流れでした。私のセッションでは、初めての海外学会で緊張し拙い英語での説明に対しても真剣に聴いてくれる人ばかりで、内容にも興味を持って質問してもらえました。十分に伝わったとは言えないかもしれませんが、自分の言葉で他の国々の人とディスカッションできたことは大きな自信になり、大変貴重な経験となりました。

## V. おわりに

放射線治療分野において最も権威のある雑誌の一つに「International Journal of Radiation Oncology - Biology - Physics」という米国の放射線腫瘍学会 (ASTRO) の機関誌があり、通称「レッド・ジャーナル」と呼ばれます。レッド・ジャーナルに論文を掲載されることは放射線治療医にとって至高の業績であり、エキスパートの一人と認められます。今回の学会参加を通して、レッド・ジャーナルに何度も論文を載せている各分野のエキスパートによる講演や最新の臨床試験について、また、その後のディスカッションを直接聴くことができ、まさに今、標準治療が作り上げられていく瞬間に立ち会えたことに感動を覚えました。自分からは遠い世界と感じていたものが少しリアリティを持つてみるようになるようになったことは、今後の医師人生の上で大変重要な経験であったと感じています。臨床・研究ともにまだほんの駆け出しですが、いつかは国際学会の舞台に立って各国の人々とディスカッションをして、レッド・ジャーナルに論文が通ることを夢見て、日々努力していこうと思います。

最後に、国際学会での発表機会を与えてくださり、研究内容の相談から発表準備に至るまでご指導いただいた岐阜大学放射線科 松尾政之先生、岐阜大学高等研究院 兵藤文紀先生、学会参加の助成をくださった岐阜大学医学部附属病院国際医療センター長の矢部大介先生をはじめとして、お力添えいただいた皆様方に心より感謝申し上げます。



Fig.1) ポスター会場前にて(筆者中央)



Fig.4) 学会会場周辺の景色



Fig.2) 学会会場の雰囲気



Fig.3) 企業ブースの雰囲気